

英語の Associative Anaphora についての一考察

安藤 裕介

0. 序

1970年代以降、語用論が以前のように哲学的論議の中で語られるのではなく言語学的背景の中で論じられるようになって以来、Associative Anaphora についてもその分析をより精密なものにするために多くの研究者が様々な視点から論じてきた。と言ってもその基本的な立場はそれほど差がないので最新の研究もそれ以前の研究も、確かに上述した様に理論的な精密さは増してきたが端的に言って同工異曲という印象はぬぐいきれない。

本稿では、Associative Anaphora の分析を、これまでの分析とは異なり、3つのレベルで行うことが妥当であることを論じていく。第1段階では、Associative Anaphora を一般意味論の枠組みで処理することが望ましいと考え、第2段階では、談話の参加者が、文脈、前後関係、談話内で取り扱われる項目のプロトタイプ、スキーマ等を考慮し、協調の原理を遵守しながら、個々の参加者の意図性、容認性を踏まえて、通常、行う Associative Anaphora の理解のみを取り扱うことが望ましいと考え、第3段階では個人レベルでの Associative Anaphora についての理解を語用論の枠組みで処理することが望ましいと考え、第1段階、第2段階との相互関係、相関関係の中で容認可能性についての言語フィルターを設定することで適切に対応できるということを述べていく。議論の手順としては先行研究をまず批判的に検討して、その後、その問題点を克服できる代案を提示していきながらその理論的妥当性を証明していく。

1. 先行研究の概観とその問題点

第1章では、Associative Anaphoraについての先行研究を概観し、その問題点について検討する。序章で述べたように、Associative Anaphoraについての先行研究は、基本的に同工異曲の感があることは否めない。しかし、最新の研究が理論的により精密なものになっていることは明らかである。ゆえに、そのような最新の研究の中の代表的なものをいくつか取り上げ、それを概観し、その問題点を浮き彫りにすることが本章の目的と最も合致すると考えられる。

1.1. Miéville (1999) の分析

Miéville (1999) では Associative Anaphora についてのいくつかの特性の公式化を試みている。そこで使用されているのは、ある点で発展的であり、創造的である Lesniewskian Logic で、そこで取り扱われているのは、全体と部分との関係等の、Associative Anaphora に関して言えば、最も良く議論されてきた分野である。精密な理論化がなされているのは事実であるが、筆者自身もそのような分析法の限界を認めているし、本稿の目的である Associative Anaphora についての個人レベルの理解という点を全く考慮していないという意味において（論理学的分析を行っているという点で当然かもしれないが）この問題についての踏み込んだ議論になっていない。

1.2. Kleiber (1999) の分析

Kleiber (1999) では Associative Anaphora に関与する2つの指示物の間にあてはまる関係の分析によって生じる問題に対する答えを出すことを試みている。そこでは、その関係のメカニズムには2つの要因が作用していることが示されている。その2つの要因とは、Alienation と Principle of Ontological Congruence であり、それらによって次の文?Pierre a exposé son dernier tableau. La beauté (=la beauté du tableau) est fascinante. [Pierre exhibited his latest painting. The beauty (=the beauty of the

painting) was fascinating.] や ?Max entre. Les yeux (=les yeux de Max) sont hors de leur orbite. [Max comes in. The eyes (=Max's eyes) are out of their sockets.] や ?Paul ouvrit la commode. Le bois (=le bois de la commode) était polychrome. [Paul opened the chest-of-drawers. The wood (=the wood of the chest) was polychrome.] が逸脱しているから見なされ、次の文 Paul lava la voiture, mais oublia le capot (=le capot de la voiture) [Paul washed the car but forgot the bonnet (=the bonnet of the car)] や Max entre, les yeux brillants. [Max comes in, the eyes shining] が適格であると見なされることが説明できると主張している。この分析も理論的枠組みが明確であり、実証的な精密な研究になっているが、Associative Anaphora の容認性の個人差をほとんど全く考慮していないという点において不十分であるといえる。

1.3. Lavigne-Tomps & Dubois (1999) の分析

Lavigne-Tomps & Dubois (1999) ではリーディングにおける文脈の影響と Associative Anaphora との関係について論じている。特にリーディングが続いているときの心理言語学的過程として認識される場所と時間の照応関係について査定している。この議論の中では、様々な統語的パラメータと照応関係に適用される意味的変項に加えて、関連性の強さに基づきコンテキスト（主に先行詞）から照応表現を予測できるとしている。結局のところこの Associative Anaphora はコンテキストの制約によって引き起こされる推論によって解決できるとしている。他の研究者の認知推論的仮説や語彙ステレオタイプ仮説を援用しながら議論を進めている。この研究も Associative Anaphora に関する様々な問題を網羅的に扱っているという点で評価できるが、Associative Anaphora の容認性の個人差をやはりほとんど全く考慮していないという点において不十分であると言える。

1.4. Apothéloz & Reichler-Béguelin (1999) の分析

Apothéloz & Reichler-Béguelin (1999) では、Associative Anaphora は定名詞句のみによって導入され、指示的名詞句はその役割を担うことがで

きないというこれまでの研究の説明と解釈を吟味し、多くの場合、それらは不十分であるということ、それどころか、談話指示の生成と受容についての動的モデルを適用することによって、非同一指示的な指示的名詞句を記述することは可能であるということ、主に、フランス語の例に基づいて論じている。ここで主に述べられているのは、上述した様に、指示的名詞句の Associative Anaphora に関する問題であり、しかも、取り上げているのが、主にフランス語の例なので、本稿では、これ以上議論する必要はないと思われる。前節までで触れてきた容認性の個人差の問題についてもほとんど全く触れられていないのは言うまでもない。

1.5. Charolles (1999) の分析

Charolles (1999) の分析は、Associative Anaphora についてのさまざまな研究の中で、ある意味で、最も代表的なアプローチからの考察がなされたものといえよう。その意味において、Charolles (1999) については、少し詳細に概観する。

Charolles (1999) は(1)~(6)の下線部の定名詞句は先行する不定名詞句を指示することは難しいとしている。

- (1)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The picture showed a cathedral.
- (2)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The month was in French.
- (3)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The typewriter was an old model.
- (4)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The ribbon was old.
- (5)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The rubber band was broken.
- (6)? A letter was awaiting Sherlock Holmes.
The waiter must have taken it up.

Charolles (1999) では(1)の場合, a letter と the picture {on the stamp (the picture は the stamp 中の絵なのである)}, (2)の場合, a letter と the month {on the postmark (the month は消印の中に含まれている月なのである)} の間に transition もないし, そもそも, the picture や the month は, a letter にとって “first-degree part” でも “stereo-typical part” でもないので, それぞれの不定名詞句と定名詞句を結びつけるのは難しいと説明している。確かに, 途中で transition があつた方が, その両者を結びつけるのは容易であろうが, 発話文の受容者にその transition を的確に推測できる想像力があり, 実際にそれを駆使したならば, その両者を結びつけることは可能であると思われる。その両者を結びつけるのが難しい理由は, the picture が何の絵なのか, the month が何の月なのか的確に特定することが容易ではないほど, それぞれの指示物に対する考えられる候補が複数, 存在することにある。その複数の候補の中から, 受容者がただ1つの適切な候補を, 想像力を駆使した結果, 選び出すことができたならば, その場合には, その受容者にとって先行する不定名詞句と後続する定名詞句の間には適切な照応関係が成立すると解釈されると考えられる。Charolles 自身も, 明示した形では述べていないが, そのような可能性を完全に否定しているわけではないように思われる。それは(1), (2)それぞれにおいて, 容認度について*ではなく?を付していることからうかがい知ることができる。要するに, それぞれの両名詞句を指示, 照応関係に関して結びつけることは容易ではないが, 不可能でもないと言っているのである。これは個人差という問題を全く無視しているわけではないととらえることができるが, 上述したように, 明示的に言っているわけでもないので, 後述するように, そのような個人差の問題も理論的枠組みの中に組み込むために言語フィルターという概念を導入するほうが適切だと思われる。

(3)(4)についても, Charolles (1999) は同様のことを主張している。a letter と the typewriter, a letter と the ribbon についても照応関係を確立させるのは難しいと論じている。注目すべき点は, それぞれの文の照応関係の難しさの程度を同じだと考えている点 (共に?レベル) である。このことについては直ちに納得することが難しい。というのは the ribbon はあくまで

も the ribbon of the typewriter である以上、照応関係の確立の難易度は the ribbon の方が the typewriter よりも 1 ランク高いと思われるからである。Charolles (1999) では照応関係の難しさを考える場合、transition という考え方を導入しており、その意味において、(4)の場合、transition の数が多く、照応の難易度が高いと考えられ、共に、? レベルというのは受け入れがたい。

(5)(6)でも同様のことが主張されている。それぞれの例において照応関係が成立しないのは the rubber band や the waiter が the letter にとって stereotypical part と考えにくいからであると論じている。

(7)? A bus stopped on the square.

The passenger got out.

(8) A bus stopped on the square.

The passengers got out.

(9) A bus stopped on the square.

A passenger got out.

(7)~(9)は多少、状況が違うが、基本的な考え方は同じである。(7)が容認が難しく、(8)、(9)が容認されるのはバスに通常、乗客は複数乗っていると考えられるので、1人しか乗客がいなかったことが想定される(7)は、通常フレームから逸脱しており、乗客が複数いると想定される(8)は通常フレームの範囲内であり、バスと乗客の間に何らかの関係があることを規定している不定名詞句と定名詞句の関係でない(9)は、言語使用の点から全く問題ないと考えられるからである。

要するに、Charolles (1999) では次のようなことが述べられているのである。受容者が定名詞句を解釈するとき、その定名詞句の指示物は唯一的に指示されうるし、唯一的にアクセスできる。特に、先行名詞句とそれを受け取る名詞句の間に、典型的な部分と全体の関係が成立する時には、それが容易になされる。しかし、そうでない場合、つまり、その両名詞句の関係を理解するには、何らかの transition が必要であると考えられる場合、受容者が

その関係を理解するためのスキーマを確立できない場合、指示物に対する唯一指示が困難になる。その場合でも、受容者はコンテキストを可能な限り利用して、その関連性を探り、唯一指示確立のために努力するのである。

Charolles (1999) の議論でも、この小論で度々問題にしてきた容認性の個人差についてやはり、ほとんど取り扱われていない。また事実観察に関してもやや問題がある。しかし、それらを除けば、概して無難な議論を展開していると言えよう。

2. Associative Anaphora の取り扱いについての代案

—言語理解の三層構造の観点から

前章では、最近の Associative Anaphora に対するアプローチとしては代表格である Charolles (1999) 等を概観しながら、その問題点についても触れてきた。本章では、そのような先行研究の内容と問題点を踏まえて、Associative Anaphora についての新しいアプローチを言語理解の三層構造という観点から提案し、その理論的妥当性を議論する中で、この考え方が、意味論、語用論の領域の中でいかに射程が広いかにについても議論を展開する。

2.1. 言語理解の第1段階

Associative Anaphora の先行研究は、前の章で概観したように、理論的に精密になってきたとはいえ、皆、ひとつの壁にぶつかっている。その原因は、この問題を皆、ひとつのレベルで取り扱っていることに起因する。ひとつのレベルで取り扱う事により、様々な観点が錯綜し、問題の所在を不明確にし、なおかつその問題を複雑なものにしていると考えられる。したがって、この問題を解決するには、言語理解の三層構造という観点が必要と思われる。その第一段階では、Associative Anaphora を一般意味論の枠組みで処理することが望ましいと考えられる。そこで問題になるのは、先行不定名詞句 A と後続する定名詞句 B が照応関係にあるかどうかについての記述である。前者が不定冠詞＋名詞句の構造をしていて、意味的に、あるいは、理論的に後者（通常は、定冠詞＋名詞句）と何らかの関係があると見なされるならば、

照応のための必要十分条件は満たされていると言える。ただし、このレベルでは、意味的に、あるいは、理論的に、ほとんど全く、関係がないと思われる場合も排除されるわけではない。少なくとも、構造的に条件を満たしているならば、次のレベルでの分析の対象になる。

2.2. 言語理解の第2段階¹

先行不定名詞句Aと後続する定名詞句Bが照応関係にあるかどうかを論じる場合、例えば、a letterとthe letterのようなFaithful Anaphoraの場合、通常、言語内の問題として処理できるので（統語論が最も得意とする状況である）その言語表現の発話者の意図や受容者の受容能力等はほとんど問題にならない。

取り扱いが難しいのは後続する定名詞句Bの定冠詞以外の名詞句の部分が先行不定名詞句Aの不定冠詞以外の部分と同一でない場合、一見、何の関連性もないように思える場合である。そのような場合でも、後述するように、Leech（1983）等で提案されている会話における協調の原理を、会話の参加者が守っているならば、発話者は自分の意図が伝達可能だと認識して当該言語表現（ここでは不定名詞句と定名詞句）を使用するはずであるし、受容者は、発話者のそのような意図（ここでは先行する不定名詞句と後続する定名詞句は何らかの関係があるはずであり、発話者はその様な意図を持っている）を認識し、その名詞句間の関係を理解するために、文脈や世間知等を利用して、最大限の努力を払うのである。

会話の参加者のそのような理論的枠組みを構築する際に必要不可欠なのは、認知言語学的考え方、特に、プロトタイプの考え方であると思われる。プロトタイプ論的見方では、何であっても、その構成員にたいして、その境界は連続的でかつ、あいまいであると考えられる。そしてこの見方の方が記述的妥当性が高く、実際の人間のものの見方について正しい姿を捕えることができると主張する。要するに、古典的意味論が前提とするようなYes/Noの二項対立という考え方を否定しているのである。プロトタイプとはカテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象合成物もしくは集合体を言う。つまり、プロトタイプはそのカテゴリーの代表的な成員なのである。実際問題において

は、そのプロトタイプと現実の指示物との合致性、及び、カテゴリーの成員間に見られる段階性が問題になるが、それらは成員の持つ属性の有無に基づくのではなく、それを主体的に捕える人間の側が合致性を査定することにより生み出すものと考えられる。このプロトタイプと成員とがどの程度合致しているかを測る基準を、典型的条件というが、より多くの条件を備えていれば、その成員はよりプロトタイプの的であり、共有している属性が少なければ、より周辺的な成員だということになる。なお、すべての成員に共通しない属性が、なぜ、カテゴリーを特徴づける属性と見なされるかについてはウィットゲンシュタインの家族的類似性という考え方で説明できる。そこでは、成員の部分的な共通点がお互いに連鎖することによってカテゴリーの統一性を保っていると考えられる²。

認知科学的な考え方、プロトタイプの考え方について河上（1996）を参考にして議論を進めてきた。ただし、認知心理学では、知識構造を表わすのにより抽象的なスキーマという概念を用いる。（注2で述べたようにこの考え方は、プロトタイプ理論の問題点を克服できる。）スキーマとはあるものや事象に関する過去の経験に基づく知識をより抽象化、構造化して一つのカプセルに納めたもので、人間の記憶もしくは知識というのはこの種のスキーマの集合体だと考えられている。この背景には、言語活動はスキーマと常に照合し、「意味」を見い出そうとする、人間主体のきわめて能動的な過程だという考え方が根底にある。この考え方は上で述べた受容者の容認性という考え方、即ち、最大限に発信者の意図を解釈、理解し、認知しようという考え方である。要するに、これまではカテゴリーの周辺的成員の逸脱の度合を測ることができなかったが、その成員がスキーマとどの程度合致するか、という観点からその度合を評価できるのである。この理論的枠組みの中で重要な位置を占める理想認知モデルについては、ある社会、文化の中で、私たちがごく普通の条件の下で振る舞う理想的な状態や理想的な知識構造をモデル化したものと言える。その際には、そのモデルの中で、個々の項目やその意味が、使用される社会に照らしてどのように解釈されるかを考慮しなければいけない。即ち、発信者は、受容者に対して協調的に最大限に配慮しなければいけないのである。その際には発信者の意図性、発信者の何らかの意図を心

から伝達しようという気持ちが考慮されなければいけないのは言うまでもない。注意すべきことはこのモデル自体には所謂、段階性は存在しないが、このモデルと、与えられた状況に対する私たちの理解との適合の度合には段階性があるということである。もちろん、その際にはその項目が使用されるコンテキスト、それよりも文化的、一般的なコンテキストに依存して決められるのであり、その語項目の基本的意味、理論的意味については一般意味論で規定されるべきことである。

Sweetser (1987) は社会一般について次のような理想認知モデルを提案している。

有用性の原理：人は助け合おうとするもの

【通常のコミュニケーションの理想認知モデル】

- (a) 人は何かを言う時、それを真実であると思っている場合、またその場合に限って、他人の役に立とうとしている。
- (b) 人は、他人の役に立とうとしない場合、またその場合に限って他人をだまそうとしている。

【正当な根拠のある確信の理想認知モデル】

- (c) 人が真実であると思っていることには、十分な理由がある。
- (d) 人が十分な理由があつて真実であると思っていることは、真実である。

結局のところ、この理想認知モデルは、多少、理論的には精密なものになっているが、上述した所謂、協調の原理と本質的には変わらないように思われる。いずれにせよ、談話の関与者は、個々の発言内容に関して、常に、この理想認知モデルに照らした推論を行うことが必要とされるのである。そしてこの推論過程モデルを明示することが理論的に意義あることであると思われる。

要するに、第2段階では、談話の参加者が、文脈、前後関係、談話内で取り扱われる項目について、上で述べたようなプロトタイプ、スキーマ等を考慮し、Leech (1983) 等で提案されている協調の原理を遵守しながら（理想認知モデルに照らした推論が行われているといってもいい）個々の参加者の

意図性、容認性を踏まえて、通常、行う Associative Anaphora の理解のみを取り扱うことが望ましいと考えられる。

2.3. 言語理解の第3段階

ここまで筆者が提案する言語理解の第1, 2段階について論じてきた。第1段階は言わば論理的レベルなので特に問題はない。問題となるのは、第2段階であり、この段階の内容については個人差があるということである。会話における協調の原則について言えば、確かに、会話の参加者がこの原則を守っていないならばそれは意味のない、非伝達的な談話であると言える。(この問題についてはここではこれ以上議論しない。)時には、会話の発話者があえて、定名詞句使用の原則を守らない場合がある。即ち、定名詞句を当然、使うべきところであえて不定名詞句を使用したりするような場合である。この場合、発話者は協調の原則は守っている。しかし、何らかの表現効果を狙ってそのような有標の名詞句使用を行っているのである。(この問題についてもここではこれ以上、議論しない。)議論すべきなのは、会話の参加者がどの程度、この原則を守っているかである。この名詞句間の関係を探ろうと受容者が一生懸命、努力するかどうかである。その程度差によって談話の容認度は大きく変わってくると思われる。つまり、会話の参加者がどの程度、協調の原則を遵守しているかによって、意図性、容認性が理想的な状態に達しているかどうかによって談話の容認度は大きく変わってくると思われるのである。

想像力、知識量の差も大きな問題になる。想像力、知識量が乏しい受容者の場合、談話の容認度は著しく低下すると考えられるからである。Charolles (1999) 他で取り上げてある例も多くはこれと関係している。前の章で取り扱った例も豊かな想像力、豊富な知識を有する受容者であれば、容認可能とすることは十分考えられる。逆の場合も当然考えられる。談話の個々の参加者の談話内で取り扱われる項目についてのプロトタイプ、スキーマ等が同一の状態、理想認知モデルが実現されている状態であるならば、全く問題はないが、そのような状態でないことが現実には多く見られるわけだから、そのことに配慮した理論が必要なのである。要するに、容認可能性の

判定につきものの個人差を無視して容認可能性に関する結論を出した場合、当然出てくる反論に対処すべき理論的枠組みが必要なのである。

結局のところ、第3段階では、個人レベルでの Associative Anaphora についての理解を語用論の枠組みで処理することが望ましいと考えられる。そのためには、第1段階、第2段階との相互関係、相関関係の中で容認可能性についての言語フィルターを設定することが望ましいと考えられる。第1段階で容認された Associative Anaphora、一般意味論の枠組みで処理されているためにきわめて多くの容認可能な Associative Anaphora が、上で述べたような認知科学的枠組みの中で構築され、理想認知モデルが実現されていると考えられる第2段階の中で、言語表現容認のための諸条件を満足している Associative Anaphora として選抜されるのである。その後、第2段階を通過した Associative Anaphora が第3段階の個人個人の言語フィルター（個人の想像力、知識量、文法力、語彙力の差等が反映されている）の中に取り込まれるのである。（ゆえに、例えば、乏しい知識量しかない聞き手の場合、その言語フィルターを通過した結果、通常、容認される言語表現を容認しないことがあるが、それもこの言語フィルターの設定によって説明可能になる）そこでは言語表現の容認度の個人差が反映された理論的枠組みが構築されたと考えられる。即ち、個人間の容認度の違いが、個人間の言語フィルターの違い、そのフィルターによって構築された言語認知モデルの違いと見なされるのである。その個人の言語フィルターが第2段階までの内容と同じ場合、即ち理想認知モデルが実現されている状態のみを、Associative Anaphora の先行研究はほとんど取り扱ってきたと考えられる。しかし、現実にはそうでない場合が圧倒的に多いわけだから、そのような場合も視野に入れた個人の言語フィルター、言語認知モデルを設定することは理論的に有意義であると思われる。しかし、このフィルター、言語認知モデルの詳細については別稿に委ねる。

3. 結論と今後の問題

本稿では、Associative Anaphora の分析を、これまでの研究とは異なり、

3つの段階で行うことが妥当であることを論じてきた。ただし、この論文では英語と一部のフランス語以外の例文は扱わなかった。これ以外の言語、特に日本語の例文について今後は議論を展開するつもりである。また、第3段階で提案した言語的フィルターの中味についてはより精密な構造を今後、提示していくつもりである。

注

- 1 本節での認知言語学の基本的な考え方、プロトタイプ理論については河上(1996)を参考にしている。
- 2 なお、このプロトタイプ理論の問題点については、河上(1996)の中で次のように指摘されている。

カテゴリー化についての理論では、単純にカテゴリー形成の条件を羅列するに止まるのではなく、カテゴリーの成員の中でどれがプロトタイプで、どれがプロトタイプから逸脱しているのか、そのずれの度合はどの程度か、等を示す内部構造記述が必要となってくる。この問題点を克服するものとして提案されたのが、フレーム、スキーマという知識構造についての理論仮説を基本にした理想化された理想認知モデルという考え方である。知識構造としてのフレームとは、次のように説明される。私たちはいわゆる典型的な状況の連続を記憶の中に保持しており、それに関係する語に遭遇したとき、常に背景にその「保持された枠組み」を喚起する。それがフレームと言われるものである。そのとき関与するのが社会常識や百科事典的知識であり、それらによって行動様式のフレームが喚起されるのである。

参 考 文 献

- Apothéloz, Denis & Reichler-Béguelin, Marie-José, 1999. Interpretations and Functions of Demonstrative NPs in Indirect Anaphora. *Journal of Pragmatics* 31: 363-397

- Charolles, Michel, 1999. Associative Anaphora and its Interpretation. *Journal of Pragmatics* 31: 311-326
- Hawkins, John, 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. London: Croom Helm.
- 梶田 優, 加藤泰彦 (編) 1998. 『海外言語学情報』 第9号 東京: 大修館書店.
- 河上誓作 (編) 1996. 『認知言語学の基礎』 東京: 研究社.
- Kleiber, Georges, 1999. Associative Anaphora and Part-whole Relationship: the Condition of Alienation and the Principle of Ontological Congruence. *Journal of Pragmatics* 31: 339-362.
- Langacker, Ronald, 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Descriptive Applications*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Lavigne-Tomps, Frédéric & Dubbois, Danièle, 1999. Context Effects and Associative Anaphora in Reading. *Journal of Pragmatics* 31: 399-415.
- Leech, Geoffrey, N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Lyons, Christopher, 1999. *Definiteness*. London: Cambridge.
- Miévillie, Dennis, 1999. Associative Anaphora: An Attempt at Formalisation. *Journal of Pragmatics* 31: 327-337
- Prince, Ellen, 1981. Toward a Taxonomy of Given-new Information. In C. Rubattel, ed., *Radical Pragmatics*, 223-256. New-York: Academic Press.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson, 1986. *Relevance*. London: Blackwell.
- Sweetser, Eve, E. 1987. The Definition of Lie: An Examination of the Folk Theories Underlying a Semantic Prototype. In Holland & Quinn, eds., *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.